

「立ち上がる農山漁村」選定案概要書

取組分野：【交流】

1. 都道府県、市町村 熊本県山都町<sup>やまとちょう</sup>
2. 事業者名 財団法人清和文楽の里協会
3. 取組みの名称 文楽の里づくり
4. 取組概要等

概要

清和地域（旧清和村）に、江戸時代嘉衛年間より伝承される清和文楽を核とした文楽の里づくり。神社の春秋の奉納芝居として農家の手によって受け継がれた農村文化。そのお祭りでは、各家庭より持ち寄った重箱弁当が開かれ、それは料理の互審会ともなり、清和の郷土料理の基礎を築いてきた。

国の減反政策がはじまり、穀物中心の農業から野菜へと大きく転換していく社会情勢のなかで、清和ブランドを立ち上げ農産物に付加価値をつけたい。

観光資源が乏しいと思われた清和の器のなかを再考した時、熊本県に唯一残る人形芝居と、宮下で育まれた郷土料理。はじめにしっかりした農村文化というソフトがあった。過疎の暗闇は自然観察の絶好の場所でもあった。

農産物のブランド化、清和文楽のロゴマークを作成し、清和から出荷される農産物すべてにそのマークがつけられた。

**村の主幹作物であるトマトには多大な年月と知恵と労力を入れ、「清和ブランド」を確立した。**さらには、**農家の蔵を市場に出そうと味噌や漬物等の加工品も商品化された。**トマトジュースや栗菓子等、新商品も高い評価を得ている。

**文楽の里づくりのきっかけとなった清和文楽は、観光との連携により、都会から清和への交流人口を増加させ、隣接する物産館では、地産地消も定着化している。**

野菜が縁で大阪文楽の重鎮である豊竹嶋大夫監修の新作「雪おんな」も完成し、清和の文楽・野菜（農業）・郷土料理・自然環境すべてが携わる文楽の里づくりが推進された。

農業を活かすための観光施策の一端を担った清和文楽の里協会の活動は、今後も大いなる田舎の再生に向け、農村で暮らす方程式を模索していく。

活動の規模

項目	H14	H15	H16	H17	H18
売り上げ	163,722	210,739	217,200	213,559	207,014
解説	単位：千円 文楽館入場料、物産館販売額他				
来客数	120	120	120	120	120
解説	単位：千人 文楽館・物産館・天文台来館者				
雇用者数	22	26	27	28	28
解説					
イベント回数	20	20	20	20	20
解説	単位：回				

活用している地域資源

- 1 清和地区（旧清和村）の郷土料理、清流、山、人材、暗闇など地域の全て
- 2 農産加工品、トマト、高原野菜、栗
- 3 清和文楽人形芝居、農村舞台（神社の境内）、清和文楽館、清和物産館、清和高原天文台

#### 地域活性化のポイント

- ・江戸時代より伝承される清和文楽を核として、農家の手によって受け継がれてきた農村文化による文楽の里づくりによって、職場や仕事が少ない地域内で、若者が残り定住できる職場を創出してきた。
- ・地域資源を活用した生産・加工・販売の6次産業化や、文楽の里のイメージを活かしたブランド化・付加価値化の展開、生産者直売による価格設定などによって所得率の向上を図っている。また、流通の見直し、ITの積極導入により地域外への販路も開拓している。
- ・観光との連携により交流人口が増すことによって、地域経済の活性化が図られている。

#### 事業の今後の展開方向

今後も、清和地区フィールドミュージアム構想により、あくまでも「清和」の形を大事にしながら、農村文化を芸能や食・農という形で発信していく。

基本を「清和」に、モノサシの尺度も「清和」に持ち、農村発の挑戦を試みていく。

村に暮らす人々が、自らの手で村を再生できるよう、村の経営学、人と自然が共存する田舎暮らし、人の暮らしに必要な経済的裏付けを模索していく。

